



但馬水産技術センターだより



漁況情報 (G2316号)

令和5年5月15日

兵庫県立農林水産技術総合センター
但馬水産技術センター 発行

1. 2023年度第1回日本海スルメイカ長期漁況予報をお知らせします。

国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所と日本海沿岸各道府県水産関係機関が検討し、水産資源研究所がとりまとめた2023年5月～7月のスルメイカ漁況予報をお知らせします。

【今後の見通し(2023年5月～7月)】

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海沿岸域（下図参考）

対象漁業：主にいか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群

(1) 来遊量：前年および近年平均を下回る。

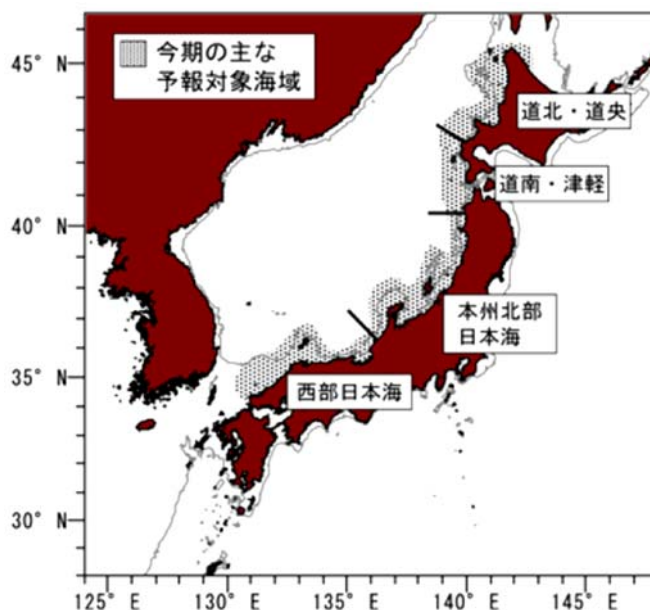
(2) 漁期・漁場：主な漁場は本州北部日本海で漁期は近年同様。

※「近年平均」は最近5年間（2018年～2022年）の平均。

※「本州北部日本海」は秋田県～石川県を示す。

詳細は、別添の予報文資料をご参照下さい。

予報内容の詳細は、国立研究開発法人水産研究・教育機構のウェブサイト（2023年度プレスリリース：<https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2023/index.html>）にも掲載されています。



お問い合わせ先：
兵庫県但馬水産技術センター（鈴木）

TEL：0796-36-0395 FAX：0796-36-3684

email：nouringc_tajima@pref.hyogo.lg.jp

ホームページ：https://www.hyogo-suigi.jp/tajima/

2023年度 第1回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2023年5月～7月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海沿岸域

対象漁業：主にいか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群

- (1) 来遊量：前年および近年平均を下回る
- (2) 漁期・漁場：主な漁場は本州北部日本海で漁期は近年同様

* 近年は最近5年間(2018年～2022年)

I 漁況予報

日本海におけるスルメイカの資源調査結果（2022年10月～11月のスルメイカ稚仔調査I、および2023年4月のスルメイカ新規加入量調査）と2023年度第1回日本海海況予報を主要な情報として、今期（2023年5月～7月）の日本海沿岸域におけるスルメイカの漁況を下記のとおり予測した。併せて2022年12月のスルメイカ稚仔調査IIの結果と、2023年4月のスルメイカ漁期前分布調査で得られたスルメイカの分布状況も示した。

【予測】

今期（2023年5月～7月）の日本海沿岸域へのスルメイカ来遊量は、前年および近年平均を下回ると予測される。また、近年の海洋環境、漁況および調査結果から主な漁場は本州北部日本海で漁期は近年同様で5月下旬以降と予測される。

【情報】

- (1) 2023年4月に実施したスルメイカ新規加入量調査の結果では、今期漁獲対象になると予測される外套背長5cm以上のスルメイカの1調査点あたりの採集尾数は1.0尾で、前年（10.0尾）および近年平均（6.7尾）を下回った。
- (2) 2022年10月～11月に実施したスルメイカ稚仔調査Iでは、親魚量の指標となる幼生の分布密度は、2021年および過去5年（2017年～2021年）平均を下回った。
- (3) 2019年以降、5月～7月の漁獲量は本州北部日本海において全体の60%～82%を占め、その他の各海域では多くても全体の20%程度に留まっている。特に道北・道央および道南・津軽海域では漁獲割合の顕著な減少傾向が続いており、2019年以降は両海域併せても全体の18%を下回った。
- (4) 2023年度第1回日本海海況予報では、スルメイカの漁場形成に影響を与える4月中旬～6月の対馬暖流域の表面水温および50m深水温は、どちらも平年値（日本海海況予報における1986年～2015年の平均値）よりも「かなり高め」と予測されている。2019年以降は同様の傾向が続いており、今期の主な漁期・漁場は近年同様であると予想される。
- (5) 2022年8月～12月の小型いか釣り漁業等によるスルメイカ（生鮮）の漁獲量は、本州北部日本海を除く海域で2021年を下回り、道北・道央および道南・津軽では過去5年平均を下回った。一方、2023年1月～3月の漁獲量は、本州北部日本海を除いて前年を上回った。

II 説明

1. 調査結果

1) 4月におけるスルメイカの分布状況

<目的>

いか釣り漁業では外套背長15cm以上のスルメイカが主な漁獲対象となる。したがって、いか釣り漁業で漁獲される前のスルメイカ（主に外套背長2cm～10cm）の分布状況を把握することで、その後の漁況を予測することが可能となる。そこで、日本海では主漁期前の4月に漁獲加入前のスルメイカの分布状況を把握するために新規加入量調査^{*1)}を実施している。なお、本調査で採集されたスルメイカのうち、外套背長5cm以上のサイズが本予報期間（5月～7月）の漁獲対象になると想定される。

加えて本予報期間（5月～7月）の前半に漁獲対象となるスルメイカの日本海での分布状況を把握するため、2019年より4月にスルメイカ漁期前分布調査^{*2)}を実施し、スルメイカの分布状況を整理した。

*1) スルメイカ新規加入量調査：網口幅10m～12mの表層トロール網を用いた採集調査。各調査定点で3ノットの速度で30分間曳網して実施。

*2) スルメイカ漁期前分布調査：自動いか釣り機による釣獲試験。各調査定点で夜間に原則8時間の釣獲を実施。

<結果>

2023年の新規加入量調査では、表層トロール網を用いた採集調査を29点で実施した（図1）。2022年と比較して外套背長5cm未満の小型個体の割合が高く、また沖合域における採集尾数が少なかった。外套背長5cm以上のスルメイカは前年よりも数が少なく、昨年度は1調査点において最大78尾の採集があったが、今年度は最大でも8尾に留まった。

1調査点あたりの平均採集尾数は5.8尾で、前年（13.3尾）の44%、近年平均（20.1尾）の29%であった。一方で、本予報期間（5月～7月）の漁獲対象になると想定される外套背長5cm以上の平均採集尾数は1.0尾であり、前年（10.0尾）の10%、近年平均（6.7尾）の14%であった（図2）。

また2023年の漁期前分布調査では、いか釣り調査を16点で実施した（図3）。分布密度の指標となるCPUE（釣り機1台1時間あたりの漁獲尾数）の平均値は0.6尾で、前年（2.9尾）を下回った。CPUEは鳥取県沖の点で最大で6.4尾であった。またスルメイカが漁獲されなかった点もあった。漁獲されたスルメイカは外套背長17cm～18cmの前年夏～初秋生まれと推測される個体の割合が比較的多かったが、本調査において漁獲の多かった一点の体長組成を反映していると考えられた。

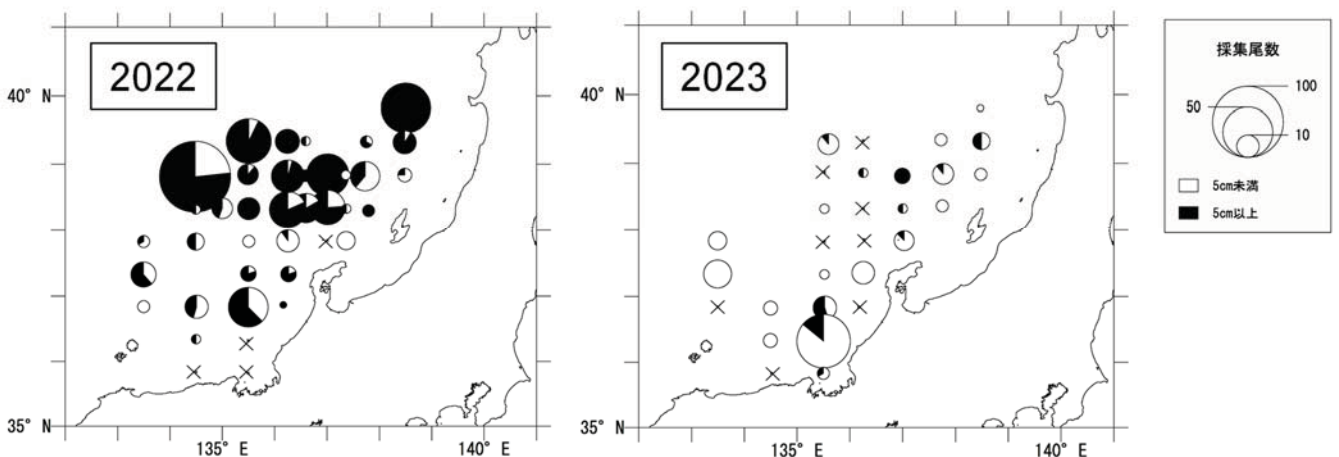


図1 2022年および2023年4月のスルメイカ新規加入量調査結果

○の面積は採集尾数、×は採集されなかった調査点をそれぞれ示す。

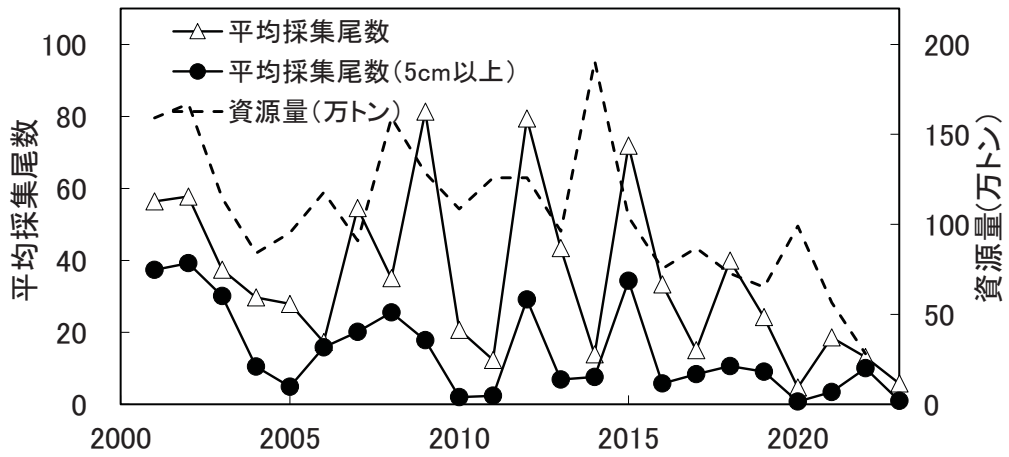


図2 新規加入量調査による平均採集尾数（全数および外套背長5cm以上）と推定資源量の経年変化
推定資源量は令和4年度スルメイカ秋季発生系群の資源評価に基づく。

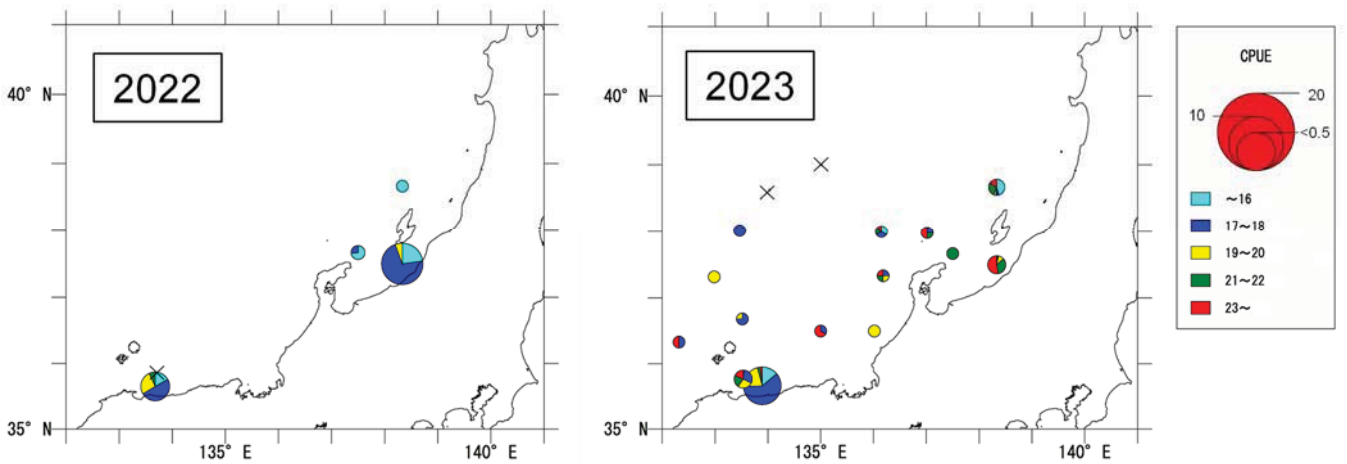


図3 2022年および2023年4月のスルメイカ漁期前分布調査結果

●の面積はCPUE（釣り機1台1時間あたりの漁獲尾数）、各色は各外套背長範囲（cm台）の比率、×は採集されなかった調査点をそれぞれ示す（CPUEが0.5未満の調査点については●の大きさを最小とした）。

2) 2022年秋のスルメイカ幼生の分布量

<目的>

5月～10月の日本海では、主に前年の秋～冬に生まれたスルメイカ秋季発生系群が漁獲される。したがって、秋～冬のスルメイカ幼生の分布量は、その年のスルメイカ秋季発生系群の親魚量指標値になる。そこで、日本海では毎年10月～11月および12月にスルメイカ稚仔調査I、II^{*3)}をそれぞれ実施し、親魚量の把握を行っている。

*3) スルメイカ稚仔調査I、II：口径45cmのプランクトンネット（網目0.33mm）を用いた採集調査。各調査点で深度150mから海面までの鉛直曳によって主に外套背長1mm～3mmのスルメイカ幼生を採集する。

<結果>

2022年10月～11月の調査ではスルメイカ幼生はほとんど採集されず、鳥取県沿岸と五島列島周辺海域でのみ採集された（図4左）。幼生が2個体以上採集された調査点は無く、1調査点あたりの平均採集尾数は0.07尾で、2021年の調査結果（0.33尾）の20%、過去5年（2017年～2021年）平均（0.30尾）の22%に留まった（図5）。2022年の調査で採集された幼生のうち、外套背長1mm未満の孵化直後の個体の平均採集尾数は0.03尾であり、2021年調査結果の僅か9%であった。なお、参考情報として12月の調査においても幼生はほとんど採集されず、1調査点あたりの平均採集尾数は0.01尾（前年0.03尾）であった（図4右）。したがって、調査の結果から今回の予報対象の群の親魚量が少なかったことが示唆される。

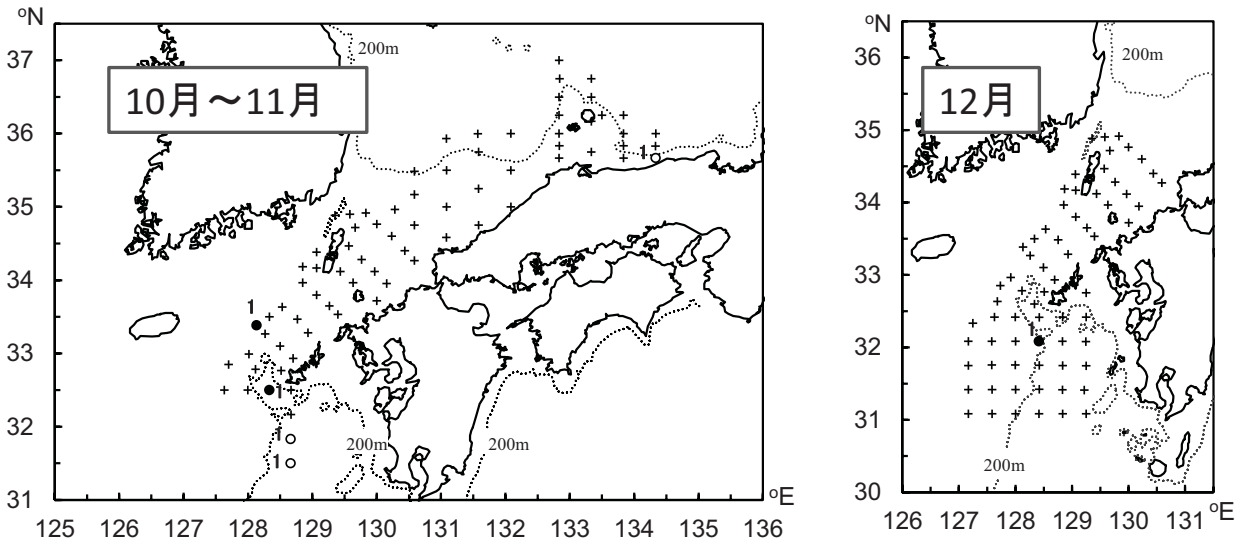


図4 2022年10月～11月（左）と12月（右）におけるスルメイカ幼生の分布調査結果

● 外套背長1mm未満の幼生が1個体以上採集された調査点、○ それ以外の幼生のみが採集された調査点、+ 幼生が採集されなかった調査点。図中の数字は各調査点における採集尾数。

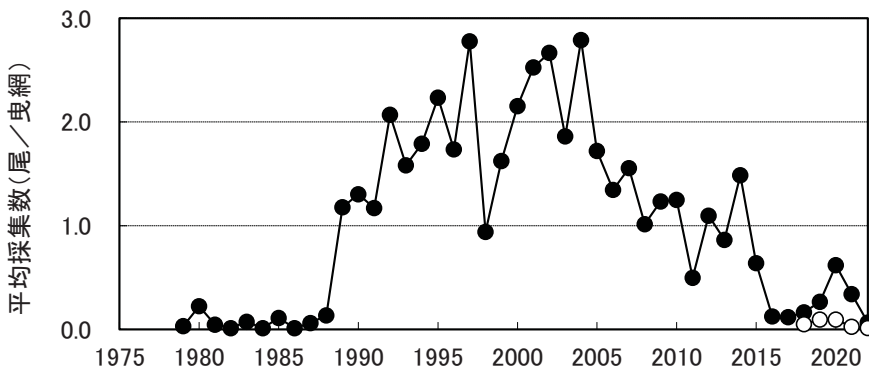


図5 スルメイカ幼生の1調査点あたりの平均採集尾数の経年変化
●は10月～11月、○は12月の平均採集尾数をそれぞれ示す。

2. 日本海における海洋環境

スルメイカの分布回遊は水温と深く関連しており、沿岸域の漁場形成は主に水温に影響を受ける。2023年度第1回日本海海況予報^{*4)}では、4月中旬～6月の対馬暖流域の表面水温および50m深水温はともに平年値よりも「かなり高め」と予測されている。2019年以降は同様の傾向が続いており、主な漁期・漁場は近年同様であると予想される。

*4) https://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2023/20230407_jpn/index.html

Ⅲ 日本海沿岸域におけるスルメイカ漁況の経過

日本海では、1月～3月上旬は前年の冬（主に1月～3月）に生まれたスルメイカ（冬季発生系群）が漁獲され、3月中旬～4月は前年の春～夏に生まれたスルメイカ、5月以降は前年の秋（10月～12月）に生まれたスルメイカ（秋季発生系群）が漁獲の中心となり、時期により漁獲対象となる系群が異なる。このため、1月～3月の漁況は予測対象期間の漁況に関連しない。

前年の予測対象期間（2022年5月～7月）では、小型いか釣り漁業を主体とした生鮮スルメイカの漁獲量は日本海沿岸全域で過去5年（2017年～2021年）平均の78%と下回った（図6, 7）。海域別に見ると、道北・道央、道南・津軽がそれぞれ過去5年平均の13%、56%と下回り北海道まで北上する群れが少なかったことが考えられる。一方で本州北部日本海、西部日本海は過去5年平均の90%および101%であった。8月～12月計は、道北・道央、道南・津軽がそれぞれ過去5年平均の7%、36%と下回った一方で、本州北部日本海、西部日本海ではそれぞれ91%、105%であった。

前年までの予測対象期間（5月～7月）における日本海沿岸全域の海域ごとの漁獲割合の推移を図8に示す。各海域の漁獲割合の推移を見ると、2018年まで道北・道央では6%～28%、道南・津軽では9%～49%で推移していた

が、2019年以降は顕著な減少傾向が続いており両海域併せても全体の7%~18%に留まった。一方で本州北部日本海の漁獲割合は、2018年まで27%~60%で推移し、2019年以降は60%~82%と増加した。以上のように、2019年以降の予報対象期間の主な漁場は、本州北部日本海となっている。

2023年1月~3月の漁獲量については、本州北部日本海では1月~3月は前年の85%、近年平均の52%となった一方で、西部日本海では1月~3月は前年を146%と上回り、近年平均の101%であった。

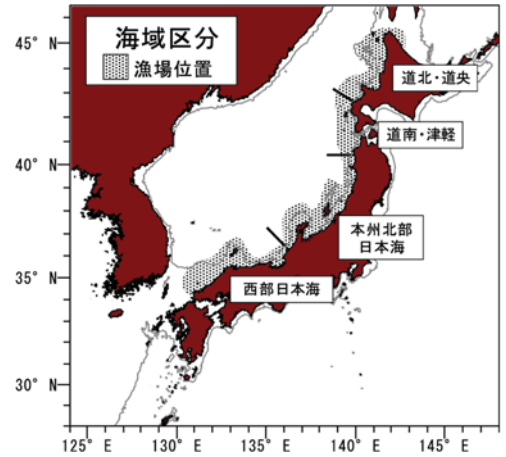
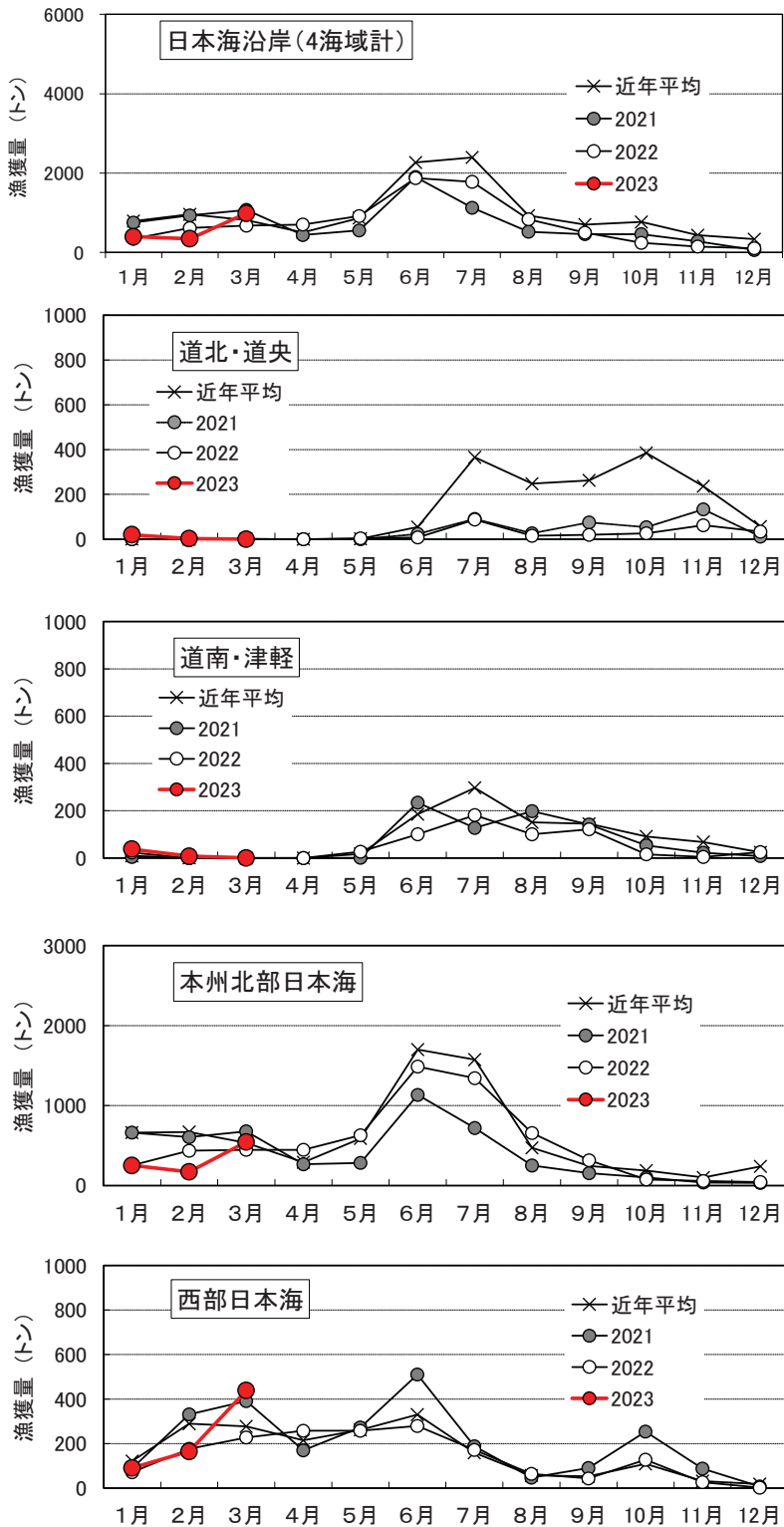


図7 本予報における漁獲量の海域区分
道北・道央は宗谷～後志、道南・津軽は渡島、檜山、青森県、本州北部日本海は秋田県～石川県、西部日本海は福井県～長崎県をそれぞれ示す。

図6 日本海沿岸(4海域計)および海域ごと(図7)の漁獲量(近年平均、2021年、2022年および2023年)の経過
ただし2023年の一部は未集計および速報値

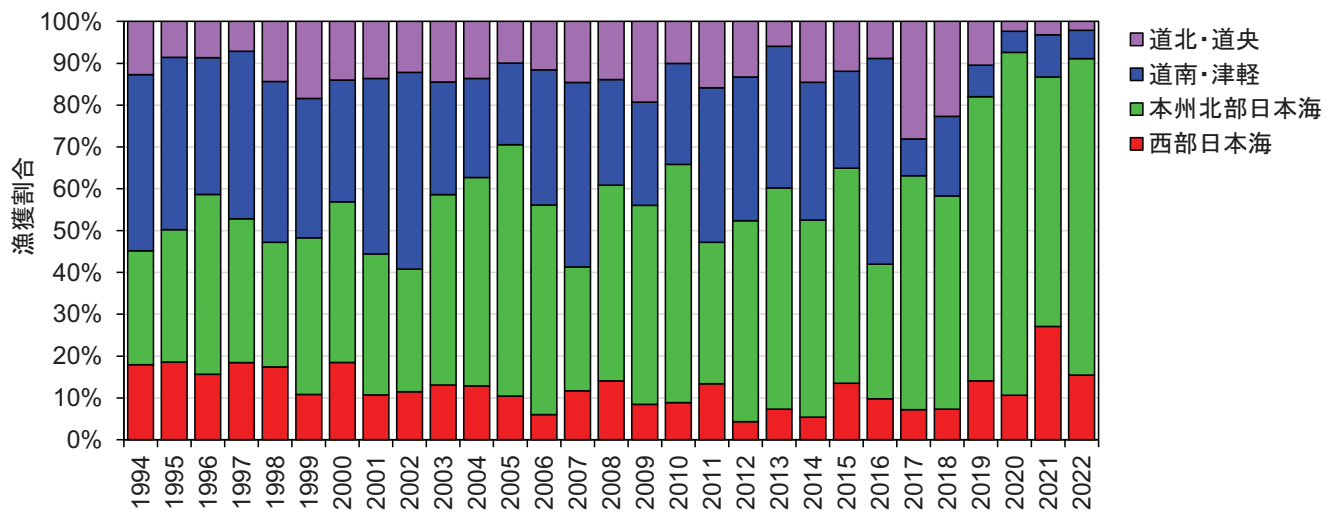


図8 5月～7月における日本海沿岸全域に占める海域ごと（図7）の漁獲割合の推移

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場 稚内水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産研究所	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター (取りまとめ機関)
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所